ヴェルリオーカ

カヴェーリン　田辺佐保子 訳

群像社

ヴェルリオーカ
Verlioka (Верлиока)
1991年 4月20日　初版第1刷発行

著者　ヴェニアミン・カヴェーリン
Kaverin, Veniamin Aleksandrovich
(Каверин, Вениамин Александрович)
訳　者　田辺佐保子
挿　画　大串玲子
発行者　浅川彰三
発行所　株式会社 群像社
〒101　東京都千代田区猿楽町 2-3-1
TEL .03(3291)6153　振替　東京 4-95943
印刷・製本　岩城印刷株式会社　TEL .03(3579)0006

ISBN 4-905821-71-1　C 0097

Japanese edition © Gunzosha Ltd., Publishers,
Tokyo, in 1991
This Japanese edition is published
by arrangement with
VAAP(Copyright Agency of the USSR), Moscow.

訳者　田辺佐保子（たなべ　さほこ）
早稲田大学文学部大学院卒。成蹊大学、電気通信大学講師。訳書にドゥーロワ『女騎兵の手記』（新書館）、ポゴレーリスキイ『アリョーシャと黒いめんどり』（旺文社）、ドラープキナ『あの愛はいま』（岩崎書店）など多数。

万一、落丁乱丁の場合はおとりかえいたします。

ヴェルリオーカ

カヴェーリン

田辺佐保子 訳

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目

次

第一章　作者が読者にバラ色の牡猫とスコットランドのバラを紹介する。……11
第二章　プラトン・プラトーノヴィチは睡眠薬を飲んでいても……16
第三章　マカロニ詩はマカロニとは何の関係もない……25
第四章　作者が読者にイーワの二乗を紹介する。……30
第五章　名高い長靴をはいた猫もフィーリャとくらべれば……35
第六章　荒れた庭園での出来事。……38
第七章　猫のフィーリャはニヤリと笑って目を細め……44
第八章　奇跡は音楽と、あるいは奇跡は詩と結びつきが……48
第九章　作者が読者に蝶の「アポロン」に似た青年を紹介する。……50
第十章　蝶に似た青年がイワノフ家を訪問……57
第十一章　イーワがわが身の幸せをかみしめようとすると……63
第十二章　ワーシャが家族の写真と語り合い……66
第十三章　バスの運転手がイーワに見とれて……73
第十四章　予言者オオガラスが謎めいた物語を語って……77
第十五章　イーワが老いたオオガラスのものまねをし……82

第十六章　猫はいきのいい魚にありつけず……92
第十七章　猫が第十六章で作者が言わずにおいたことを補足し……97
第十八章　錫（すず）の兵隊たちが行進し……101
第十九章　コトマおじさん町で前の年に起こったことが語られる。……107
第二十章　ボクシングがバスケットボールと比較され……110
第二十一章　猫は自慢話を……117
第二十二章　コトマおじさん町の人びとがソ連全土にわたる公開捜索を……122
第二十三章　猫のフィーリャが太陽の黒点に仰天する。……136
第二十四章　「魂の安息」ホテルの窓から、異常ずくめの光景が望まれる。……146
第二十五章　カサカサ町では、誰もが誰にたいしても、まったく無関心なのでは……150
第二十六章　カサカサ町では、誰もが誰にたいしても、まったく無関心なのだ……159
第二十七章　死は変身には関係のないことが証明され……165
第二十八章　ルカ・ポルフィーリエヴィチが代休を取り……168
第二十九章　イーワの身に起こったことが語られる。……176
第三十章　イーワに記憶がもどってくる。……187

第三十一章　さし迫ったレオン・スパルターコヴィチとワーシャの対決が……198
第三十二章　オリガ・イパーチエヴナのパイプのつきが悪く……209
第三十三章　善い行いは水に沈まず、火にも燃えない……214
第三十四章　登録長官が、自分には母さんがなかった、と嘆く。……220
第三十五章　登録長官が、ときには経験ゆたかな予言者でも誤りを犯すことを証明する。……225
第三十六章　老いたオオガラスが本当にまちがった……233
第三十七章　魔法の力によらずになしとげられる奇跡……240
第三十八章　舞台に新しい登場人物が現れる。……244
訳者あとがき……257

ヴェルリオーカ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　作者が読者にバラ色の牡猫とスコットランドのバラを紹介する。バラは、年金暮らしと孤独とがいつも寄りそう仲だったと言いはる。身分証明書係のミス。

この物語はスコットランドのバラと牡猫フィーリャの会話ではじまります。おまけに、このバラと猫がツーカーの間柄でも、なにも驚くことはないのです。

スコットランドのバラは、この家の女主人のつもりでいますが、そう思うのも無理もないことなのかもしれません。

一階の食堂には楕円状に張り出した窓があって、床から天井までとどく大きなガラス窓がならんでいます。こんな広いところにいても、バラはまだ窮屈そうでした。美人というのは、自分が美人だってことを知っているものです。スコットランドのバラも知っていました。この世のすべてに慣れっこになってい

る太陽の光でさえも、すらりとして、しなやかなこのバラの枝をつたっていくときには、歩みをのろくします。どう見ても、太陽の光にあるまじきふるまいなのですがね。バラのほうもゆるゆると這う太陽の光をせきたてたりはしません。たがいに相手が気に入っていたのです。ところがバラは、他の恋の奴には、だれにもかれにも気のないまなざしを向けるばかりでした。

フィリップ・セルゲーエヴィチ、またの名フィーリャ（バラは話し相手をこう呼んでいました）はどうかといえば、この猫ときたら、かの有名な長靴をはいた猫でさえ、ただのいい奴として影がうすくなるくらいのたいした猫なのです。手入れがゆきとどいて、すべすべしたバラ色がかった赤毛に、竪琴にも似てふんわりとした大きなしっぽ。この猫は、気位が高く、若くしてはや不動の地位をきずいたおれさまにとっちゃ、ネズミ取りなんざ暇つぶしの余興よ、なんて思っていました。老晦さと廉潔心とを、また、やくざっぽさとドン・キホーテの英知や気高さとをあわせもった猫なのでした。

「わたしは子どもが好きなのよ」

スコットランドのバラが言います。

「それに、あなたって、どうして、そんなふうに考えるのかしらねえ。この家に坊やがあらわれたら、プラトン・プラトーノヴィチはわたしたちにかまわなくなるだなんて」

「じゃ、あんたはとにかく、その坊やがやってくる気でいるわけだな？」

「そうよ」

「なぜだね？」

「いいこと？　長年にわたるひたむきな願いごとには、なにか不思議な力がこもっているのよ」
バラは考え考え話します。
「その願いごとには、なんだか、ご当人からひとりだちして生きはじめて、おしまいには目的を果たしてしまうってところがあるの。プラトン・プラトーノヴィチの奥さんのことは、おぼえていて？」
「とうぜんだろ」
フィーリャはさもいやそうなくちぶりでした。
「あの人はくる日もくる日も三面鏡の前から離れなかったものだから、いつだったか三面鏡がわたしにこぼしたくらいよ。もうこれ以上、あのそっくり返った鼻や、まぬけで気まぐれな唇を見るのは耐えられないってね。あの人が子ども嫌いなのは、一目でわかったわ。自然はそうした女性に罰をくだしますもの。それも、当然ながら、厳しい罰をね。『どうして』って、ききたいのでしょ？　きまってますよ、あなた、想像力が欠けているからですよ。子どもがなかった、で、あの人が死んでしまうと、孤独が音もなく家にしのびこんできた。旦那さまがひっきりなしに部屋の中を行きつもどりつ、息子がいたらなあと夢想なさったって、ちっとも不思議はないわ」
「じゃあ、身分証明書係のミスについちゃ、どうお考えかな？」
スコットランドのバラのしなやかな枝えだに微動がひろがりました――バラが笑ったようです。
「あれは本当におかしな事件よね。誰かの身分証明書がプラトン・プラトーノヴィチの身分証明書のよこに置いてあった。そしたらうっかり者の娘が身分証明書の『子供』の欄に『息子ワシーリイ』と書き込ん

だあとで、もう一枚の方にもそのとおり書き込んでしまったのよね。でも、幻想ってものは……幻想ってどういうものか、ご存じ？」

「あたりきよ！」猫はすっとぼけました。

バラは思いやりをみせて、ちょっと黙っていました。

「それは想像の世界のことなのだけど、思う以上にずっと現実に近いのよ。旦那さまはそのミスを訂正なさらなかった。あの人の心のなかで生まれた坊やが、もう時間と空間のなかに自分の席をとってしまったからなの。あなたは運命を信じる？」

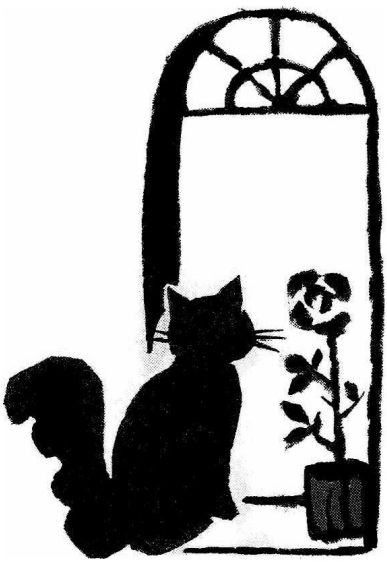
「いいや」フィリップ・セルゲーエヴィチは答えました。「おいらは唯物論者で、原因もないのにものごとが起こるはずがないと確信しているんでな」

「そうじゃないわ。わたしの考えでは、この出来事にはまさに運命が介入しているのよ、運命と争うのは無駄なことだし、危険なくらいだわ。旦那さまは年金暮らしに入られた。でも、年金暮らしと孤独とはいつも寄りそう仲なのよ。もしも、あの方の願いがかなえられたならばねえ……　想像してみてよ、あの方の暮らしが変わるだけじゃないわ、わたしたちの暮らしまで、一変するわよ！　お正月まであと一週間。旦那さまは坊やに樅の木を買ったでしょうね。わたしはその樅の木とおしゃべりをするのだけどな。わたしたちみたいな室内植物はいつも森の中で起こっていることが気になって、知りたいものなのよ。坊やはオリガ・イパーチエヴナのお手伝いをして、花に水をやるでしょうね。あの女は重たいじょうろを持ちあげるのが、日ごとに身体にこたえるようになってきているのよ」

「あんたは楽天家だよ」猫がつっかかります。「おいらにゃ、もう、見えるようだぜ。その坊やがおいらのしっぽに罐からを結びつけて、オリガ・イパーチエヴナに耳を引っぱられるまで、庭中追いかけまわすところがな」

そして猫は一声高く、いまいましげに、ニャーオッと鳴きました。その光景がありありと目に浮かんだからです。

「静かに」スコットランドのバラが怒って言います。「旦那さまは、きょうは、効き目の強い睡眠薬を飲まれたのよ。だから、あなたが起こしてしまったら、頭痛に苦しまれることになるのよ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com